

派遣者番号	30K06	氏名	原 梨絵
研究主題 —副主題—	「主体的・対話的な学び」を「深い学び」に到達させる指導と評価の一体化 —対話場面における形成的評価を通して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	吉谷 武志 教授
所属校	文京区立千駄木小学校	校長	山口 麻衣

キーワード : 評価・対話・国語

1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

新学習指導要領全面実施に当たり、「主体的・対話的で深い学び」を研究主題にして校内研究に取り組む学校が増えている。多くの学校で「主体的な学び」や「対話的な学び」の手だては開発されてきているが、「深い学び」に関しては評価規準が明確になっていないことから、研究の課題として挙げられることが多い。対話的な活動は取り入れていたとしても表面的な学びに留まってしまう理由として、一つは、少人数のグループ活動にすることで活動時間の確保ができる反面、一人の教師が各グループの対話を見取ることが困難であり、子供任せの活動になってしまうことである。もう一つは、学級全体での対話において、目指すべきゴールが分からず、深まりを追究するには膨大な時間がかかってしまうことに対して、効果的な対応策が見付けにくいことである。しかしながら、「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業改善は、授業の型だけ習得していけば到達できるものではない。文部科学省(2017)は、小学校学習指導要領総則編において、「各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する視点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにする」として、学習評価の充実を求めている。本研究では、「主体的・対話的な深い学び」の学習過程が単なる活動で終わるのではなく、教科のねらいを達成する「深い学び」に到達するための学びになるよう評価に焦点化して研究を行う。特に、対話場面における形成的評価に着目し、個の見取りを丁寧に行い児童にフィードバックすること。見取りを次時の授業構成に生かして指導改善を行うことを通して、「深い学び」に到達できるような「指導と評価の一体化」を提案する。

2 研究の内容・研究の方法

本研究では、「主体的・対話的な学び」を「深い学び」に到達させるための指導と評価の一体化を目指すため、対話場面における形成的評価に着目して次の研究を行った。

まず、先行研究の検討を通して、「主体的・対話的で深い学び」と対話論についての理論的な整理を行った。その上で、各地の研究発表や授業見学に参加し、整理した理論的知見に基づいてこうした実践を再検討し、新学習指導要領が目指す評価の在り方を踏まえて授業を構想した。特に、対話場面における形成的評価を整理し、授業実践に向けて、具体的手法を考察した。「深い学び」の評価については、深さの見取りの困難さが議論されがちではあるが、まず、「深い学び」に向かう学習過程としてのプロセスが成立しているかという点を意識して、単元を構成していくことが重要であると考えた。そして、単元のねらいを達成していること。単元を通して自己の学びの変容が分かることが「深い学び」に到達させるための評価であると考えた。その学習過程において、自ら問いを設定し、見通しをもって学習に取り組む「主体的な学び」と、自己内対話と他者との対話の往還によって思考を深める「対話的な学び」を位置付けていくことが必要である。

次に、所属校において6学年児童73名に国語「ぼくの世界、君の世界」(教育出版)の授業実践を行った。単元指導計画に評価計画を位置付け、対話的な学びとしての自己内対話と他者との対話を設定した。形成的評価を実質化するために児童自身が評価に参加し、学びを深める手だてとして、児童の学習感想を一覧にした「座席表型評価補助簿」を活用して、教師の補助発問を具体化した。また、単元の中で3回のパフォーマンス評価を実施し、ルーブリックを示すことで学習のゴールを意識しながら主体的に学ぶことにより、「深い学び」に到達できたかどうかを学習の成果物から検証した。

3 研究の結果

本単元では、形成的評価を蓄積するために学習の振り返りとして行った児童の学習感想（第1時、第2時、第5時）を座席表型の一覧表に入力して評価補助簿として活用した。座席表型評価補助簿には、学年学級・単元名・指導時数（何時間目か）・本時のねらい・評価基準（A/B/C）・感想の分類の説明を記載した。個々の学習感想は、互いの立場が分かるように色別で示すことにより、どんなことに関心をもっているのかが、ひと目で分かるようにした。この座席表型評価補助簿からは、次の三つの効果が得られた。

第一に、児童の学習意欲の向上と相互評価の視点の獲得である。全員の児童の意見と立場が見えることで、互いの意見の共通点や相違点を知ることができる。特定の児童だけでなく全員の感想があることで、児童の意欲を高めるとともに授業に全員が参加してつくり上げているという意識をもつことができた。

第二に、個の学びの変容の把握である。授業中に空欄の座席表を持って机間指導を行い、経過を記録する手法はよくあるが、その場での指導のための評価に留まる。この座席表型評価補助簿では、児童の記述が蓄積していくため、個の学びの変容がより正確に評価できる。また、座席表の形にしておくことで、グループ対話においても、座席表型評価補助簿を持って回ることで、適切な補助発問が可能になる。

第三は、学級全体の対話場面における活用である。学級一人一人の考えを一覧にしておくことで、誰と誰の意見をつなげるか、どの順番で取り上げていくか分析し、学級全体の対話においても焦点化が可能になる。個の意見を把握しておくことで単元のねらいに沿って学びを深めていくことが可能になる。

つまり、対話的な学びを深めていくためには教材研究を十分に行うとともに、児童一人一人の思考を把握して評価し、児童にフィードバックしていく指導のプロセスが重要である。

このように形成的評価を蓄積していくことにより、様々な意見を引き出すことができる。「〇〇さんも同じようなことを書いていたよね？理由を話してくれる？」「△△さんは、前回と変わったけどどうしてそう思ったの？」と教師が広げていくことで、様々な児童が対話できる場をつくることができた。

4 研究の考察

本研究では、「主体的・対話的で深い学び」の学習過程が「深い学び」に到達するよう対話場面における形成的評価に着目した。座席表型評価補助簿を活用して個を見取って、補助発問を検討して児童にフィードバックすること。見取りを次時の授業構成に生かして指導改善を行うことを提案した。PDCAサイクルを改善し、Checkから始めてPlanを行い、PDCAを繰り返す指導改善のサイクルを表した。

Planから始める一般的なサイクルでは、単元指導計画が児童の実態に合わずにスタートしてしまい、肝心のCAまで至らずにPDのサイクルになってしまうという今の学校現場の現状がある。Checkから始めて形成的評価を積み重ねることにより、CAに重点を置いた単元構成に変えることで指導と評価の一体化が実現し、「主体的・対話的な学び」としての手法を「深い学び」に到達させることができるようになると思われる。

5 今後の展望

本研究で提案した「座席表型評価補助簿」は、全ての授業で活用することは難しいが、一つの教科や領域の中で学期に一度でも活用すると児童の考えを把握することの大切さが分かるので、授業改善の視点として、校内研究や若手育成の場において取り組むことができる。

ただし、児童の考えやつぶやきの中から「深い学び」につながるようなすばらしいものに教師が気付けるかどうかは、綿密な教材研究を通して単元のねらいをしっかりと理解しておくことが必要であり、それはどんな授業においても求められることである。A評価の児童を取り上げて全体に広げることにはしていても、そればかりでは、「主体的・対話的で深い学び」を通して育成するべき資質・能力を育むことはできない。特に「学びに向かう力・人間性」は、評価規準に達していない児童の意見もあるからこそ「なぜだろう？」という問いが生まれ、みんなで対話し考えて、「他のことも考えたいな。」「今度は違う人と話してみよう。」という経過を経て、徐々に身に付けていくものではないだろうか。

評価は、成績を付けるための評価ではなく、学びのための評価でなくてはならない。だからこそ、形成的評価を通して、指導と評価の一体化を進めていくことが重要なのである。